SEDIA Foundation

MizuMirai
ミズミライ

水の未来を育む。2015 セディア財団活動報告書

世界の水事情

インド最悪の水環境「アグラ」の町を行く。

自然に学ぶ。
森と水、森と未来。

あの人に会いたい。
C.W.ニコル

セディア財団
活動報告

公益財団法人 セディア財団

SEDIA Foundation

公益財団法人 セディア財団
〒104-0045
東京都中央区築地5丁目6番10号 浜離宮パークサイドプレイス6F
tel. 03-3549-3090　fax.03-5565-6374
http://www.sedia-found.org/

黄色の水道水。

黄色の汚物まみれの下水路に漏れてくる水。水道管からの漏水だ。そんな水もこの町の人にとっては貴重な水。汲んでは生活水に利用している。

世界の水事情①

インド最悪の水環境「アグラ」の町を行く。

インド最悪の水環境「アグラ」の町を行く。

水道の蛇口をひねると、新鮮な飲料水がほとばしる、そんな日本の日常が、彼の地の人には、いまだに夢のように映る地域がある。たとえば、インド。世界中を旅行している人でもインドの水は注意が必要と口を揃えていう。都市部でさえ、生水を飲むことは自殺行為だ。そんなインドのなかでも、最悪の水環境といわれる町がある。それがアグラ。インド北西部、世界遺産「タージ・マハル」をのぞむところに位置する町。近くを流れるヤムナ川はガンジス川最大の支流であるけれど、その汚染のひどさから「聖なるドブ川」と呼ばれている。アグラの町の上水道は、ヤムナ川から取られているので、浄水施設を通って供給されるとはいえ、大腸菌レベルの水質データは、どれだけ譲ったとしても飲み水に適している数値とはいえない。「世界の水事情」の第1回は、そんなアグラの町の水事情をレポートする。

水を汲むのは子どもや女性の仕事である場合が多い。水にありつけた子どもの顔には、笑顔が広がる。遠くの取水場まで行かなくてすむからだ。

世界の水事情 ①

インド最悪の水環境「アグラ」の町を行く。

死んだ水道水。

水道水はあるけど、飲まない。いや、飲めないのだ。

インド北西部に位置するアグラ。世界遺産「タージ・マハル」のある町としてご存知の方も多いと思う。しかし観光客が行き交う通りからはずれていくと、そこには日本では信じられない水事情があった。

アグラの中心部からヤムナ川を越えた先にあるトランスヤムナ地区。早朝になるとあちらこちらから人が現れて、ある地点をめざしていく。通勤と思うにはその様子がおかしい。みんな手にポリタンクやバケツを持っているのだ。彼らがめざすのは町の取水場。各家には水道が通っていない。一日の必要な生活水はここで汲まなければならないのだ。

早朝の取水場に列をなすには訳がある。なんとこの町の水道の給水時間は早朝の数時間なのだ。水の勢いは時間とともに弱くなる。8時を過ぎると、この町のはずれではほぼ水が止まる。その前に水を汲まなければならない。水が止まりそうになると町の人は驚くべき行動にでる。手動式のポンプを使い、井戸水を汲みだすように最後の1滴までしぼりだすのだ。なかには水道管に穴をあけて強引に取り出す強者も現れる。きれいごとを言っていてはここでは生きていけないんだよという表情で。水を汲めなければ、まだでている取水場へ移動する。すべての水が止まる前に、水を探して右往左往し、確保すると重い水をかかえて自宅へ戻る。その作業を何度も行う。そんな光景がアグラの朝の日常なのだ。

ただ、問題なのがこの水。飲める水ではないのだ。うすい黄色で、泥臭さも放っている。主な用途はトイレや洗濯水、あるいは行水など。飲み水はミネラルウォーター。20ℓ入りのボトルを1本10ルピー(約19円)で買う家族が多い。6人家族の場合、平均して1ヵ月で30本ものボトルを消費するという。必需品とはいえ、貧困層が多いアグラの人々にとっては経済的負担となっているのは間違いない。なかにはミネラルウォーターを買う余裕がない者もいる。"危険な水"とわかっていても、それらを飲み水に使っているとの報告もある。とはいえ暮らしに水は欠かせない。ある少女は、そんな水であっても取水場からの給水が止まるまでの間、その黄色い水を汲みつづけていた。

危険な水を飲まなければならないほど水道インフラが崩壊した理由は、現状まで放置しつづけ、悪化させてきた施策の不能、水道当局の怠慢といわれている。

人の生の源となる水が、人の生を奪うものに変わっていく。

水不足の原因は、急激に成長する人口と工業化に対して、この町の古い水道インフラが対応しきれていないからに他ならない。アグラ市を含むウッタルプラデシュ州が行ってきた水道対策の怠慢が一番の原因だ。そして浄水処理に関しては、これも設備の老朽化により水を適切に処理することができないまま上水道へ流されているのが現状。しかし浄水処理場からでたそんな水でさえ、取水場へたどり着くのは5割ほどといわれている。老朽化した水道管から漏れて失われているのだ。漏水である。そしてこの漏水が、アグラの町の健康を奪う一因になっていると聞かされると我々は言葉を失うしかない。人の生の源となる水が、ここでは人の生を奪うものに変わっているのだ。漏れた水は地表まであふれだす。そういえば雨が降らない所なのに、やけに水たまりが多いなと思っていたけれど、その原因は漏水だったのだ。暑い土地である。水たまりは伝染病や感染症の発生源となって、健康被害の原因となっているのだ。

さらに深刻なのが水源となるヤムナ川の水質である。この川はガンジス川最大の支流であるけれど、聖なる川をイメージして訪れると、幻想は一瞬にして砕かれる。一説では世界で最も汚れている川のひとつといわれている。水は黄濁色で、浅瀬であっても底は見えない。川辺にはゴミや排泄物が散乱し、異臭すら漂う。汚染の原因は上流にある。1000万人都市のデリー。この大都会の人口は既存の浄化能力をはるかに超えて増えつづけ、あふれた廃棄物をヤムナ川に吐き出しているのだ。さらに多量の排泄物、生活ゴミ、未処理の下水、近郊の工業都市からの産業排水、廃棄物なども汚染に拍車をかける。また、河川沿いにはヒンドゥー教徒の沐浴場や火葬場が数多く置かれている。さまざまな宗教活動の結末さえも、すべてヤムナ川へと帰されていくのだ。そしてヤムナ川は聖なるドブ川とさえ呼ばれるようになったのだ。

そんなアグラの現状を救うために、「アグラ上水道整備事業」というプロジェクトが発足したこともある。300キロ東方のガンジス川から水を引き、アグラの水環境の改善を行おうという計画だ。日本のようにスピーディーには展開しないが、住民の願いが叶う日も近いかもしれない。

ヤムナ川は多くのクリーニング業者の仕事場でもある。市内のホテルや家庭から請け負ったシーツなどを手作業で洗濯する。生じる汚水はそのまますべて川に流される。

世界の水事情①

インド最悪の水環境「アグラ」の町を行く。

聖なるドブ川。

漏水によって町のいたるところに水たまりができている。水道管の老朽によるものの他に、住民が水道管に穴をあけてポンプで給水する。この際の漏れる水も不衛生な水たまりになっていく。

あの人に
会いたい。

Vol.1

C.W.ニコル（作家）

1940年、イギリス南ウェールズ生まれ。高校卒業後カナダへ渡り、北極地域の野生生物調査を行う。その後、イギリスへ戻り大学へ進学するが中退。以後、カナダ政府の漁業調査局、環境局の技官として北極地域の調査などに従事。67年から2年間、エチオピアの国立公園建設のためシミアン高原へ赴き、公園長として活躍。78年、カナダ政府技官の職を辞し、小説家となり来日。以来、日本に定住し、80年からは長野県黒姫山の麓に住み、自然との関わりを大切にしながら様々な文化活動、執筆活動を精力的に行う。95年、念願の日本国籍を取得。著書に『C・W・ニコルの自然記』『勇魚』『盟約』『北極カラスの物語』『風を見た少年』など多数。2002年5月「財団法人C.W.ニコル・アファンの森財団」を設立し、理事長に就任する。

水を知ることは、生きていくための勉強、命の勉強なのです。

日本の豊かな自然に惚れ込んで移住したウェールズ人の作家は、
日本の自然の崩壊を誰よりも憂うナチュラリストでした。
子どもたちの笑顔と日本の未来のために
荒廃した信州の森を買い取り、再生活動をはじめたC.W.ニコルさん。
現在の活動、そしてこれからの展望など、
ニコルさんの想いをうかがうために、新緑がまばゆい5月の午後、
取材班は、アファンの森へでかけました。

C.W.ニコル

木を植えることは大事。だけど本当に大切なのは育てつづけることなんですよ。

ぼくが日本に来たのは１９６０年代ですが、その頃の日本は子どもの天国でした。みんな森や海や川で遊んでいた。遊ぶ場所もあったし、時間もあった。自然のなかで遊ぶことで、していいこと、いけないことを学んで成長していたのです。

ところが１９８０年代になると日本は変わってしまった。年齢を重ねた森の木々は切り倒され、川はコンクリートのせいで変わり果て、湿地はゴミで埋め立てられて自然の破壊が進んでいったのです。遊び場を失った子どもは家のなかにこもるようになる。このままいけば日本の生態系と子どもたちの未来はどうなるんだろうと悲しくなりました。森のなかで一番の絶滅危惧種は、人間の子どもなんじゃないかと絶望的な気持ちでした。

その頃、何年振りかで故郷のウェールズへ戻ったのです。この町は有数の炭鉱地で、かつては森を切り払われ、ボタ山状態の土地だったのですが、帰ってみると30年の歳月をかけて森が再生されていたのです。森を甦らせようとする人々の努力と情熱を目の当たりにしました。そのとき、ぼくは思ったのです。もう文句ばかり言うのはやめよう。ぼくも彼らのように、愛する日本のために力をつくそうと心に決め、「アファンの森」の活動をはじめました。原稿料や講演料をつぎ込んで、土地をすこしずつ買いました。そして荒れ果てた土地の手入れ。丈夫でまっすぐな木が育つように、暗かった森の間伐を行い、小川をつくって、木の1本1本に十分な光と栄養が行き渡るようにしました。その活動が「C・W・ニコル・アファンの森財団」の設立につながりました。２００２年のことです。

ぼくはね、植林することも大事だけれど、育てつづけることがとても大切だとよく言うんです。植えればおしまいじゃ森には育ちません。財団も同じ。設立することよりも活動しつづけることが大切です。いま、取り組んでいるのはセラピー。児童虐待を経験した子ども、身体に障害をもつ子どもを森へ招いて、いっしょに過ごす。ぼくが育ったウェールズでは医師が森の処方箋を書くのです。薬を少なくして、病や容体に応じて、森を週3回歩けとか、このルートに進めとか、森を利用した治療を行うのです。ぼくはそれが当たりまえと思って育ってきたので、日本では森をまったく利用しないのにびっくりしたのです。そんな記憶もあって、障害のある子どもたちの体と心の再生を森のなかで行う取り組み「アファン”5センス“プロジェクト」をはじめました。

また、東日本大震災で大きな被害を受けた東松島で「アファンの森震災復興プロジェクト」もスタートしています。心が傷ついた子どもたちの「心に希望の木を植えること」と、東松島の「命の森を育てること」を目的とした取り組みです。木造の校舎を建て、まわりの森をみんなで再生させていくことで子どもの学びの場にする計画です。ぼくは子どもたちが中学へあがるまでに、2つのことだけはきっちり教えようと思っています。大雨の中でも焚き火ができること、そして基本的な道具はちゃんと使えるようになること。東日本大震災では多くの方が寒さで衰弱して亡くなっているのです。流れてきた瓦礫はたくさんあったのに、みんなそれでは火をおこせないと思っていたのです。違います。木を割れば、なかは濡れていない。だから火はおこるのです。そのことを知っているか、知らないかは大きいのです。自然を学ぶということ、自然のなかで学ぶということは、生きていく術を学ぶことであり、命を学ぶことです。だからこそ、人間には森が必要なのです。この想いはぼくひとりだけでは伝わらないかもしれないけれど、若いスタッフが次の世代へ受け継いでくれると思います。森が育つには１００年、２００年かかりますが、ぼくたちの想いも１００年、２００年かけて伝えていきたいと思います。いろいろな活動を通してね。

自然に学ぶ。

森は水の母となり、

森をみつめることは、
水をみつめること。
水をみつめることは、
生命を
みつめることになる。

森をみつめることは、水をみつめることにつながります。水はすべての生命の源。その水をみつめることは、生命をみつめることにつながります。「森は水の母」といわれるのは、森もまた、水と同じように、生命と切っても切れない大切な場所であることを意味しているからに他なりません。

現代はたいへんな時代に直面していると多くの有識者が指摘しています。それは経済的、軍事的、そして自然環境など、さまざまな分野で暗雲が立ち込めている状況にあるからです。なかでも自然環境の破壊は目をおおいたくなる状況です。自然には生態系の循環があります。人も動物も植物も、その健全な生態系の一部であるのに、人は近代科学に基づく文明を良しとするあまり多くの生命を絶滅させ、また、絶滅の危機に追い込んでいます。森は破壊され、海も川も汚されてきました。生態系のバランスが崩れた結果、たくさんの弊害がもたらされています。その警鐘を鳴らす意味でも、今回は森と水の関係、その善循環について考えてみたいと思います。

健やかな水は森から生み出されていきます。空から降った雨は森の地中に染み込んで地下水となり、ゆっくり時間をかけて地表に湧き出てきます。地下水の流れはとても遅く、雨が地下に浸透してから再び地表に湧き出るまでには数百年かかるともいわれています。また、森の地面には、スポンジのような、小さな隙間が多くあるのをご存知でしょうか？ 山地は一般に急勾配ですが、雨が一気に河川へ流れださないのは、しっかりした木が植わっていることと、森の地面にあるたくさんの隙間に水が染み込み、地中へ蓄えられ、ゆっくり時間をかけて川へ送り出されるからなのです。森に降った雨が河川に流出するまでの時間を遅らせることにより、晴天がつづいても、渓流の水がすぐに枯れないようにする力があります。このような森林の働きは、水資源の貯留機能と呼ばれています。

また、水質を向上させるのも森の大切な機能です。いい水があるところにはいい森があるといわれますが、雨水が森林を通って土壌に染み込み、最後に渓流に流出するまでに、リンや窒素などの富栄養化の原因となる物質は、土壌中に保留されたり、植物に吸収されたりする一方で、土壌中のミネラル成分などがバランス良く溶け出すことにより、森林はおいしい水を作り出しているのです。

森は未来を知っている。

すべてはつながっている。
そのつながりが
切れたところからは
豊かな未来は生まれない。

水は森から生まれます。そしてその水は、自然豊かな川となり、たくさんの必要な養分を海岸へと運んでいきながら、さまざまな生命を育んでいきます。

川岸の木々からたくさんの生物が川に落ち、それが魚を育てる栄養分になります。川の有機堆積物も大切です。それらは細菌やカビなどの菌類、昆虫や他の無脊椎動物、さらには岩の浸食などによって分解されていきます。森からの有機堆積物の割合がもっとも多いのは、小さな水流です。地面から伸び、水の流れの上に張り出した植物の茎や木の幹は、覆いとなって陰をつくり、水温の調節を助けます。また、大小の植物が傷つき、その一部が折れるなどして水に落ち、枝からはいろいろな虫が水中に落ち、水の流れはどんどん養分を蓄えていくのです。

葉の茂った枝や幹のかたまりなどが岸から倒れ、川に落ちて、水や水中の堆積物の流れを左右することがありますが、それらもまた、生き物の住処となり水たまりや浅瀬をつくり、小魚などの隠れ場になって、非移動性の生物の生活基盤になるのです。さらに水辺に伸びた根は岸をしっかりと支え、水の上に張り出して覆い、水からの養分を摂取することを可能にします。

さらに重要なのがごく小さな水流です。ここには木をかじる甲虫の幼虫や、木の葉を裂くカワゲラの幼虫や、木をがりがり削るカタツムリなどがいます。小さな木くずがもっと大きな木の破片につかまり、水の底に沈み、そこでカゲロウや小昆虫や水底に住むカイアシの餌となります。ちょうど人体の毛細血管のように、小さな水流ではいろいろな要素の大交換が行われているのです。

森から生まれた水はやがて海へ流れていくのですが、その過程で植物や流木、昆虫などの生物を分解してたっぷりと栄養分を蓄え、川の魚や川辺の動物や植物を育てながら海へ流れていきます。そして人はその魚や植物を食べて生きていきます。

しかし現代は、森の生態系に、そして森と水の善循環に狂いが生じてきています。森や川から生き物が消えつつあります。無計画な森林管理によって、洪水や山地崩壊が日本各地で多発しています。森はさまざまなシグナルを発信しています。そのシグナルを無視したところからは、本当に豊かな未来は生まれません。だからこそ、自然について、水について、いっしょに考えていきたいと、私たちセディア財団は思います。

全国の小学生を対象にしたかべ新聞コンテストを開催。

しらべてみよう！たいせつな水のこと。第1回 全国小学生「わたしたちのくらしと水」かべ新聞コンテスト開催！

元気で快適な生活にかかせないものだからこそ、全国の小学生にも、もっと水の大切さを知ってほしい。暮らしと水の関係や、水の役割をもっと知ってほしい。セディア財団のそんな思いから誕生したのが「全国小学生『わたしたちのくらしと水』かべ新聞コンテスト」です。

そもそも水の大切さは学校の授業で習うものです。しかし物事を理解するには、受け身の姿勢より能動的な行動が一番です。その点では、課外授業としてのかべ新聞づくりは、小学生にとっていろいろな効果をもたらす、最適な学習ツールだからです。テーマを決め、自分たちで取材し、「新聞」という形でまとめていきます。作文と違い、そこには読む人に興味や関心を持ってもらえる書き方が必要となります。色や文字の大きさやイラストなど、そんな表現について吟味する機会は、学校の授業ではなかなか味わえないものです。また、友達と協力しながら取り組むことで、仲間づくりにもつながる活動になります。完成までいろいろなプロセスをたどります。どんな中身にしようか、どんなことを調べるか、調べたことをどうまとめようかなどを自問自答したり、仲間と話し合ったりと、いくつものステップを乗り越えなければなりません。完成したときの達成感は、さらにつよい友情で結ばれることになるでしょう。コンテストという形式上、順位を決めていきますが、セディア財団では、作品の優劣だけに重きをおいてこのコンテストを開催するわけではありません。あくまでも小学生の学習する姿勢、なにかについて調べたり、まとめたりするよろこび、そしてみんなでひとつの目的にむかってやりとげる達成感。これから大人への階段をのぼっていく小学生に、そんな経験をしてほしい。学習の楽しみの発見のきっかけになってほしいと願うからです。

新聞のテーマは「水」です。水の役割や水の重要性を再認識するのは、セディア財団の活動コンセプトのひとつでもあります。だからこそ、全国の小学生にも、あたりまえのように使っている水が、実は人や動物や植物など、すべての生命になくてはならないかけがえのないものと再認識してもらい、次世代を担う子どもたちに地球環境についての理解を深めていただくことを目的としてスタートしました。

そんなセディア財団の考えに、全国連合小学校長会、全国市町村教育委員会連合会など、多くの教育関係の団体が賛同してくれました。2015年6月には、日経新聞（NIKKEIプラス1）で告知。本格的な募集がスタートしています。応募の締め切りは2015年10月10日（土）。優秀な新聞には賞や記念品、副賞が授与されます。応募要項は、セディア財団のホームページからダウンロードすることもできます。どんなすばらしい作品が集まるか、いまから楽しみです。結果は日経新聞、セディア財団のホームページ、そして「MizuMirai」でもご案内いたします。

みんなでひとつの目的にむかって、話し合い、議論して、仕上げていく。学ぶ楽しみと作るよろこびをわかちあってほしい。そんな思いから生まれた「全国小学生『わたしたちのくらしと水』かべ新聞コンテスト」。全国の小学生から、どのような熱い新聞が集まってくるのか、いまから楽しみです。

2015年6月、日経新聞（NIKKEIプラス1）の全国版で「全国小学生『わたしたちのくらしと水』かべ新聞コンテスト」の紹介と告知が掲載されました。

http://www.sedia-found.org/

セディア財団のホームページでも、詳細をご紹介しています。

水を知る。学ぶ心を育む。

人の明日のために、いま、自然といっしょにできること。

2014年5月10日
青少年健全育成のための登山 ～浅間山に登ろう～

小学生高学年を中心に15名のファミリーが参加しました。晴天の中、午前8時から天狗温泉浅間口から登山開始。森林帯の登山道では登山指導員からカラマツの芽吹きの説明や、鉄分の多い沢の説明を受けながら午前10時45分に火山館に到着。湯の平では噴火の跡のクレーターを見学しながら山頂である前掛山に午後1時30分到着。浅間山の植生、火山としての歴史を学びながら大変有意義な登山となりました。

2014年6月1日
子どもの田植え体験と農業の担い手である高齢者の交流促進事業

首都圏で募集した小学生とその家族を対象に、長野県小諸市にある棚田百選で有名な菱野地区棚田で田植え体験教室を開催しました。地元の農業指導員のもと、水糸で線を引き、横一列に並んで植えました。初めて田植えを体験する子どもが多く最初は怖がっていたものの、終わりの頃には全身泥だらけになりながらも笑顔いっぱいの体験となりました。

2014年7月12～13日
視覚障害者支援事業 ～ブラインドキャンプ開催～

視覚障害者の方の活動支援として、ブラインドキャンプを開催しました。冬にブラインドスキーを開催している方々を中心に、夏の高原で楽しく過ごしていただけるよう、また、キャンプという非日常的な体験をしていただけるようブラインドキャンプを開催しました。13日は佐久平のロッククライミングセンターでブラインドクライミングに挑戦。みなさん果敢にアタックされていました。

2014年8月6～7日
千曲川をたどり新潟の海まで ～川の流れから自然環境を学ぶキャンプ支援事業～

千曲川の上流から新潟県長岡の海まで、川をたどりながら自然を学ぶ1泊2日のキャンプを実施。新潟までの途中、津南町の河岸段丘を見学し、川辺で千曲川上流にある石との比較や、石を割ってなかがどうなっているのか？ 石は何でできているのか？ 上流や途中にあった大きな石はどうなったのか？ など、講師の先生と一緒に川・海・自然について学習しました。

2014年10月5日
稲刈り体験（リンゴ収穫体験）

青少年育成、及び環境教育の一環として、都会の子どもたちとその家族による収穫の秋「稲刈り体験」を計画。しかし開催日当日、台風接近のため、急遽リンゴ農家にお願いし、リンゴ収穫体験を実施することになりました。農家さんのリンゴ収穫を体験することにより、農業や食の大切さ、大変さを体験していただき、食や環境、農業に対する理解や意識の向上をめざした活動となりました。

2014年10月25日
障害者の池の平散策支援事業

障害を持つ方、及びその家族を対象として、池の平湿原を散策していただき、清涼な高原でリフレッシュしていただくことにより、障害者自身、及び家族が外出することに対して自信が持てるようになること、家族が日ごろの介護から一瞬でも解き放たれてリフレッシュすることを目的に開催。昨年に引き続き参加された方々も多く、実り多き有意義な活動に成長しています。

2015年1月24日
視覚障害者スキー指導者研修会・スキー大会支援事業

視覚障害者の方々に対して、健康維持、増進を兼ねたスポーツへの積極的な参加を促すことにより、社会参加意識の醸成を図り、前向きで明るい生活を送れるよう支援するために、ブラインドスキー教室、並びに大会を開催。前日には指導者の研修会も開催しました。現状、ブラインドスキーの指導者が少ないので、研修会も含め、継続的に開催していく予定です。

2015年3月14～15日
障害者スキー教室支援事業

障害者（知的障害者、視覚障害者）の方々へ、健康維持、増進を兼ねたスポーツへの積極的な参加を促すことにより、積極的な社会参加意識の醸成を図り、前向きで明るい生活を送れるよう支援するため、障害者スキー教室を開催しました。今回参加の障害者の方々は、ほとんど初めてスキーをする方々ばかりであったが、適切な指導の下、それぞれスキーを楽しめたようでした。

自然と遊ぶ。自然を感じる。

水と未来。

知る。感じる。学ぶ。守る。

さあ、一緒に話し合いましょう。

水から学んだこと。
自然から学んだこと。
未来にとって大切なこと。

「MizuMirai」はセディア財団の活動報告書であると同時に、水と自然を中心に、元気で快適な未来のよりよい方向をいっしょに考えるために生まれました。

経済が発達して、なんでも、スピーディーに手に入る、便利な時代になりました。しかしその一方で、私たちの暮らしから失われていくものもあります。そのひとつが自然です。

地球温暖化、異常気象、地球のバランスは少々崩れていると感じているのは、私たちだけではないでしょう。人は自然とともに暮らし、自然から多くのことを学んで大人になってきました。しかし利便性や効率だけを優先して突き進む私たちの社会は、便利になったけれど、その分、木は伐採され、川はコンクリートで固められ、海は埋め立てられて、自然と接することができる場所がどんどん消えている状況にあります。そして自然と接する機会を失った子どもたちは、自然の豊かさや偉大さを知らないまま大人になっていきます。これはしあわせな状況なのでしょうか？ なにも昔に戻ろうとはいいませんが、自然からの学びは、いつの時代になっても、私たちが生きていくうえで必要なことだと思うのです。

大切なのは、気づくことです。どんな大きな改革も、はじめは小さな気づきからスタートします。セディア財団は気づきの場になることからはじめます。すべての生き物の命の源であり、すべてのはじまりである「水」を中心に、自然の大切さ、自然からの学びの尊さを発信し、すこしずつ自然からの学びの場を提供できるように活動していきます。そんな活動の報告書が「MizuMirai」です。こうしよう、ああしようと大上段からの意見を唱える冊子ではありません。水と自然に関する情報を発信し、セディア財団の活動を報告することで、ひとりでも多くの人の「気づきの場」になる冊子をめざしていきます。この冊子を手にとって、読んでいただき、ありがとうございます。みなさんの心に気づきの灯りがともったら、こんなうれしいことはありません。よりよい未来について、いっしょに話し合いましょう。